

第2章 教会の歴史を振り返る

1 主イエス・キリストと古代教会

キリスト教は、歴史を生きたイエスという人格に淵源します。このイエスが、キリスト（救い主）と宣べ伝えるところから、初期のキリスト教の歴史が始まります。

初期のキリスト教は、使徒言行録2章42節が描く「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心」な共同体において、その教えと実践を整えていきます。信仰の共同体すなわち教会は、礼拝を捧げるとともに、相互扶助、共同体の外の人々への奉仕活動、救貧活動などを継続し、人々の関心と尊敬を集めていったと思われます。

その後の長いキリスト教の歴史では、国家と結びついたキリスト教が絶大な権力を手にすることが起こりますが、そのような状況にあっても、キリスト教の本来の活力を取り戻すためには、歴史の発端に戻ることの重要性が繰り返し認識されました。例えば、中世の托鉢修道会の運動などが一例です。「源泉に帰れ (ad fontes)」は、キリスト教がローマ帝国に公認される以前のキリスト教草創のスピリットに回帰することをしばしば意味しました。宗教改革者たちもこの言葉を口にしていきます。

しかし、ローマ帝国が公認した時代以後のキリスト教が、急速に墮落したとか形骸化したと考えることは、いささか早計です。むしろ、キリスト教会は可視的な共同体形成を行うことによって、それぞれの時代の権力、国家、他の共同体との折衝、それらの共同体の思想的な根拠との接触によって、独自の神学に基づく教会論などを構築していきます。

初期キリスト教は、急速に共同体を拡大させていったために、2～3世紀にかけて、固有の秩序形成を行いました。その要は、洗礼志願者制度の形成であり、教会の指導者、やがて司祭と司教という専従の働き人の養成でした。

3世紀初頭のローマには、すでに司祭、司教、さらに下級の役職者というある種のヒエラルヒアが存在していたことがわかっています。6世紀ごろになると、ローマ・カトリック教会は、使徒継承という考え方を創出し、ペトロから始まるローマ司教には、特別な権能が与えられ、それが、代々継承されて、教会の存立の根拠になっているという神学思想が生み出されていきます。

古代の教会では、地域の教会には、司祭や司教がいて、信仰を保持し、教会の秩序や純潔、和合を保つ重要な役割を果たすと考えられるようになります。

さらに教会は礼拝を主宰し、指導者や司祭や司教が礼拝を司式し、説教を行い、洗礼と聖餐を執行しました。つまり、歴史のイエスに端を発したキリスト教は、「イエスこそキリストである」という信仰の要を伝えるための可視的組織である教会を形成していきます。

2 初期のキリスト教が対決した宗教思想

2～3世紀にかけて、教会は古代地中海世界に伝播していくと、教会内外の複数の宗教運動との対決という大きな問題に直面します。まずグノーシス主義です。グノーシス主義は、キリスト教に似て非なるものでしたが、独自の神理解や救済理解を持っていたので、キリスト教会に入り込んできました。グノーシス主義は、真の救済は、物質世界を超えた超越的な神を「知ること（グノーシス）」によって実現すると教えました。グノーシス主義の知恵の教師が各地に出現し、宗教集団を形成していました。彼らは、物質は悪であり、無意味であると教え、星辰世界を超えた真の知の認識に価値を置くために、キリストの受肉や苦難の救済的な意義や可視的な教会共同体、さらには司祭と司教という職務の異議などを認めることができませんでした。リヨンのエイレナイオスに代表される初期の教父たちは、生涯かけてグノーシス主義の論駁に命をかけました。さらに古代には、グノーシス主義の一派とみることができるマルキオン主義がありました。旧約と新約を峻別し、旧約の神は義にして怒りと裁きの神であり、新約聖書が証言する神は、愛と憐みの神であると主張しました。マルキオン主義は、旧約聖書と新約聖書は、別々な神を証言していると考えました。旧約の創造主は、新約の愛の神よりも劣った存在であり認めず、ルカ福音書とパウロ書簡を合わせた独自の「マルキオン正典」を作ったと伝えられています。最後に、小アジアのフュリギアで起こったモンタニズム運動があります。この運動は、モンタヌスと二人の女預言者に聖霊が降り、まもなく終末が来るという確信を得た人々が、一所に集まって宗教集団を作りました。この運動では、信仰の規範は霊を受けたかどうかであり、切迫した終末理解に基づいて、限定された信仰集団が教会とみなされました。

以上の宗教集団は、キリスト教とさまざまな接点を持ったために、キリスト教は、むしろ自分のアイデンティティの確立を行うことを余儀なくされました。グノーシス主義に対しては、キリスト教は、救済史における受肉の中心性と可視的教会の重要性を弁証するようになります。また、マルキオン主義に対しては、旧約の神と新約の神は同じ神であり、旧約と新約は切り離すことのできない一つの神の証言の書であることを主張しました。4世紀に正典形成が促された一つの要因もそこにあります。最後のモンタニズムに対しては、信仰の規範は、聖霊経験ではなくて、聖霊の位格（ペルソナ）にあること、つまり三位一体の霊にあることを明確化するようになります。

こうして、キリスト教は古代地中海世界に伝播する過程で、諸宗教思想と接触・交渉して、自己理解を深め、教会と神学形成に進むことができました。そのうえで、3世紀半ばには、アレキサンドリアでは、クレメンスやオリゲネスという博学で教養のある教父たちが活動し、アレキサンドリア学派を形成しました。彼らの神学は、古代の哲学や文学の排除や否定ではなく。それらに接ぎ木されたキリスト教神学を確立することで、キリスト教の普遍性や公同性を示しました。さらに聖書のアレゴリカルな解釈を行って、聖書の字義的な意味の背後に霊的な意味を探索するようになります。